



Hafa Adai (ハツファ・アテイ - 先住チャモロ人の言語で「こんにちは(やあ元気?)」)

<http://www.jcguam.org/jsg/top/>

2013年3月12日 最終号

グアム日本人学校
校長 中村 宏

在外教育施設とは…日本人学校とは…

「長いかな…」とも思っていた3年間がとうとう終わりに近づきました。すでに、日本への帰国は3月20日と決定しています。もちろん、しばらく離れていた日本や我が家を見るのが楽しみではありますが、やはりグアムを去るに際しては一抹の寂しさもあります。

そもそも、なぜ日本人学校への派遣教員の道を選んだのか。つい、そこへ思いが及ぶこともあります。私が小学校の教員になり立ての頃、まだ正式採用にもなっておらず講師であった22、3歳の頃、私が勤務していた学校の先輩の先生が「自分はリマの日本人学校に行っていた」と話されていたのを聞いた時、「日本人学校ってなんだ?」と思ったのが私と日本人学校との結びつきの最初でした。

そして、今からちょうど30年前の1983年、職員室の回覧文書で「在外教育施設派遣教員候補者募集要項」を目にした時、「リマの話」が想起され、即応募しました。幸い翌年バンコク日本人学校に派遣され、そこでは実に多くの体験をすることが出来ました。自分の中の価値観が変化していくのが自覚できました。そこで得た大きな財産は、多くの子どもたちや人々との出会いでした。もちろんどこにいても、教員である限り子どもたちとの出会いはあり、その時々いろいろな人との出会いはあります。しかし、日本人学校では、そのまま県内で教員をしていたら恐らく出会っていなかっただろうと思われる類の人々との出会いも多く、そのことによる学びもたくさんありました。そして何より、海外で暮らす子どもたちへの教育実践の重要さを自覚できたことが最大の学びでありました。

バンコクから帰って再び公立小学校での勤務が始まりました。日々の忙しい勤務の中でも、私の頭の中には「いつかは再び日本人学校へ行きたい」との思いは持ち続けていました。そして、ようやく2010年4月に、私にとっての2校目の日本人学校であるグアム日本人学校へ赴任することができました。以降の軌跡は、これまでの「現地報告」でレポートしてきたとおりです。

さて、文部科学省統計によると、現在88校の日本人学校と203校の補習授業校が設置されているといます。地域による偏りがありますが、これだけの規模になると、さすがに一昔前のような「日本人学校って何?」と言う人は減ってきたと思われれます。

グアム日本人学校は、設立されてから二十数年が経ち、この地でも日本人学校の存在は「あって当たり前」のこととして受け止められているはずです。

私が本校に赴任してから3年が経過しました。この間の最大の変化は体育館建設が現実のものとなったことです。国内の公立校であれば体育館は当たり前存在するものですが、私立学校である日本人学校では、ここまで到達するのに多くの関係者の大変な努力が必要でした。

また、この3年間私がグアム日本人学校を見てきた中で、本当に多くの本校に対する支援があったことも特筆すべきこととして挙げられます。少々大袈裟かもしれませんが、毎日のように「お礼状」を書いた気がします。物的・財的なご支援はもとより、多くの、そして各界の方々が来校され、児童生徒と触れ合ってくださいだったことも、実に素晴らしいご支援でした。ヴァイオリニスト、ピアニスト、南京玉すだれ、オペラ歌手、プロ野球選手、柔道家、レーサー、Jリーグチーム幹部、サッカー男子U20日本代表幹部等々…本校の砂場には赤茶けた砂が薄い層を成しているだけでしたが、なんと日本から運んだ砂を寄付していただいたのには本当に頭が下がる思いでした。小石が露出して児童生徒が転倒すると大けがをしかねない多目的コート表面処理もしていただきました。高価な校内放送機器も寄付していただきました。このような各界からのご支援は本当に本校及び児童生徒の血となり肉となったと思います。

在外教育施設は、そこに関係する者が、絶えず相当の努力をしないと発展はもちろん維持すらできないこと、さらには、そこに働く者や多くの関係者の不断の努力と同時に、それを取り巻く多くの人々のご支援があって機能し続けられる、生き続けられるものだということが、私はこの3年間で本当に良くわかりました。

私は3年間の任期を終え、間もなく日本に帰国します。この「現地報告」も今回が最後です。最後の原稿に、心からの感謝を書き綴ることのできる幸せを今噛みしめています。皆様、ありがとうございました。



とうとう姿を現した体育館